

三 語られざる宗教教育論

学校教育を中心とする教育が Formal Education であれば、学校教育外の組織だった教育は、Nonformal Education であるといえる。さらに、組織的でもなく無意図的偶発的な教育は Informal Education となる。教育史的にいえば、Nonformal Education から Formal Education へと発展していった。西田の宗教教育はどこに位置づけられるのであろうか。Formal Education としての宗教教育は、第二次世界大戦における国家神道の強制による反省から事実上消極的に理解されている一方で、「つつくりさん」や「トイレの花子さん」に代表される Informal Education としての宗教教育が、日本の学校教育の場合、蔓延しているといえる。西田によって始められた一燈園生活では、授業などでは宗教を直接教える事はないが、諸宗教を尊重するという態度がある。また共同生活そのものが宗教的な雰囲気がある。その中で Informal Education としての宗教教育が、その生活に収斂されていく。

その中であつて学校教育の集大成として修学旅行があるならば、それがトイレ掃除であるという点に注目したい。トイレ掃除そのものが一般的に厭われるものである上に、何軒も断られるという体験が重なる。それは自己を中心とした世界観や身体観を崩壊させる体験であるともいえる。これらを通して子どもたちは何を学んでいくのであろうか。ここに西田の宗教教育の語られざる本質があるということを検討したい。

接触領域としてのオリシャ崇拝

—— アメリカ黒人の社会宗教運動 ——

小池郁子

本発表の目的は、同じ「人種」と「抑圧（被害者）の歴史」を共有しているとされながらも、「近代／未開、抑圧／被抑圧」という植民地主義的な関係に位置づけられてきた「アメリカ黒人」と「アフリカ大陸の黒人」が、宗教的移動によって互いの文化に接触しながら相互交渉をおこなう、という事象を文化人類学的調査にもとづいて検討することである。

具体的には、アメリカ黒人（アフリカ系アメリカ人）のオリシャ崇拝運動と「アフリカ」が接触する社会空間を取り上げる。この社会宗教運動は、一九五〇年代半ばのアメリカ合衆国で、公民権運動が広がりを見せるなか、「反白人・反キリスト教」を掲げて始動した。彼らは、アメリカ黒人にはみずからの文化を実践する場所が必要であるという思想哲学から、アメリカ合衆国南部に、オトウンジ村という一種のコミュニティ（生活実践共同体）を拠点として建設し、そこでオリシャと呼ばれる西アフリカのヨルバの神々を崇拝し、ヨルバの伝統的な生活様式を再現しようとした。

一九八〇年代半ばから、このオリシャ崇拝運動は転換期を迎えることになった。それにもなつて、運動の成員であるアメリカ黒人のなかには、宗教・文化的な知識と技術（たとえば、

第16部会

託宣、司祭になるためのイニシエーション、通過儀礼、祭など）を経験する、あるいは、学ぶためにヨルバランドを訪問、滞在する人々がみられるようになった。こうした巡礼とも捉えることができる文化実践のなかで、アメリカ黒人は、オリシャを崇拝するナイジェリア人やそれ以外のナイジェリア人たちと出会い、交流し、その関係を持続的に維持、発展させようと試みている。

それでは、オリシャ崇拝運動とヨルバランドとの関係はこれまでにどのように議論されてきたのであろうか。たとえば、宗教的権威の授受に注目してオリシャ崇拝運動とヨルバランドとの関係を取り上げた研究がある（Hunt 一九七九、Clarke 一九九七、Pinn 一九九八）。Pinn によれば、ナイジェリアの伝統的なオリシャ崇拝組織の長が、儀礼的な宗教的権威をオリシャ崇拝運動の唱導者、アデフンミに与えたことによって、彼は運動の正統性と真正性を成員やアメリカ合衆国内外の社会に提示することができたと指摘する（Pinn 一九九八）。ただし、アデフンミの授かった宗教的権威が、その後運動の実践形態が変容していくなかで変化したことは議論されていない。ほかには、宗教文化教育の旅という視点からオリシャ崇拝運動とヨルバランドとの関係を論じた研究がある（Clarke 一九九七、二〇〇六、Eason 一九九七）。こうした研究では、アメリカ黒人が主体的に、一方のナイジェリア人（アフリカ）は客体的に記述、分析されている。そのため、運動の成員とナイジェリア人とは交錯するなかで相互に生じる問題、権威・権力関係、文化変容について十分な考察がなされているとはいえない。

そこで、本発表では、まず、オリシャ崇拝運動の唱導者や成員が、ヨルバランドのオリシャ崇拝組織とどのように接触しているのかを示す。つぎに、宗教的移動によって促されるアメリカ黒人とナイジェリア人との対話的な交流が、オリシャ崇拝運動にどのような影響を与えているのかを検討する。そのうえで、本発表はつぎの四点を明らかにする。一、オリシャ崇拝運動の拠点や運動の唱導者たちの正統性が相対化された、二、運動のなかで人種（民族）・宗教を横断する眼差しが培われている、三、運動のなかで客体化されていた「ナイジェリア人（アフリカ）」が、身体的な交流をへて同時代性を増しつつある、四、運動が再構築されることで、その集合性と連続性が維持されている。

カルティニにおける「新しい時代」の人間像

相澤 里 沙

カルティニ（一八七九—一九〇四）は、インドネシアの国家独立英雄の一人で、女性運動や教育運動の草分けとして、またナショナリズムに先立って民族意識覚醒を促した人物として知られている。十九世紀の後半から、オランダの植民地であったインドネシアにおいては、現地人貴族（プライヤ）の中から、オランダ語の能力をもつ知識人たちが現れ始め、自らの思想を形成していった。カルティニもそのような知識人の一人である